



TITLE:

物價調節對米價調節問題

AUTHOR(S):

戸田, 海市

---

CITATION:

戸田, 海市. 物價調節對米價調節問題. 經濟論叢 1923, 16(1): 130-148

ISSUE DATE:

1923-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127982>

RIGHT:

# 東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 一 號      第 十 六 卷

大正二十一年一月一日發行

新餘剩價值說及社會階級協和論	法學博士 田島 錦治
租稅配分 <small>に於ける</small> 公益逆比の原則	法學博士 神戸 正雄
個人と團體との關係	法學博士 財部 靜治
サン・シ モンの社會改造哲學と社會連帶思想	文學博士 米田庄太郎
マルクスの階級概念	文學博士 高田 保馬
物價調節對米價調節問題	法學博士 戸田 海市
資本論中 <small>或るの</small> 各種版本 <small>に於ける</small> 異同 <small>について</small>	法學博士 河上 肇
今後の植民政策の基準	法學博士 山本美越乃
農業勞働自治組合制	法學博士 河田 嗣郎
營業稅改正論	法學博士 小川郷太郎
物價問題の統計的研究	法學士 汐見 三郎

## 物價調節對米價調節問題

戸 田 海 市

### 第一、目下の世論と研究の要點

本年の米作は六千萬石強となり、未曾有の豐作たる大正九年の收穫にも劣らざる豐作となれる上に、古米の殘存高も七百萬石強と推測せられ、之が爲め短日月の間に米價が二三割の下落を爲し、今後更にも更に下落せんとするの形勢あり、是に於て農村代表者は彼の日本米の年々の需用供給の不均衡を矯正して其價格を安定せしむることを目的とする米穀法を運用し（昨年制定の所謂常平倉制度）、從來米價を引下ぐる爲めに實行を停止せられつゝありし外米輸入税を此際復活するは勿論、日本米を政府に買上げて供給の過剰を防ぎ、以て米價の不當なる下落に由る農村の疲弊と之に伴ふて起る今後の米作の衰退と、小作爭議の發生とを防止すべしと主張し、一方には都市消費者の代表就中有意識又は無意識に其代表者となれる一般新聞紙は殆んど例外なく消費者の立場より之に反對し且つ一般物價調節を國是として實行しつゝある今日に於て、米價の下落を防止するは矛盾なりと論じつゝあり、尤も目下の米價下落防止方法としての外米輸入税復活は實際には重要視せられず、最近まで日本米と外米（輸入外米は總て白米なる故内外米價の比較は白米に付て爲

すを要す）との間に貳拾圓内外の差あるも尙ほ外米の需用が盛んとならず、従つて外米が日本米の騰貴を防止するの力微弱なりしが故に、今日の如く日本米の大に下落したる場合には外米輸入の餘地なく、現に以前より輸入せられたる外米が目下逆輸出せられつゝある有様なり、故に目下議論の焦點となれるは政府が米穀法に由り日本米を買上げて之を後日供給不足の時まで貯藏すべきや否やの問題なり。

本問題の研究に方り着眼を要する主なる點を擧ぐれば、第一主要の食糧問題解決策たる米價調節（其過大なる下落の防止）を主とすべきや、將た一般物價調節を今日の急務と認め、之が爲めには米價調節上幾分の不利を生ずるも之を忍ぶことを要するやを明かにし、第二に米價の高低が一般物價の高低に如何なる影響を及ぼすものなるやを研究し、以て米價調節を行ふことが果して一般物價調節に妨害を加ふるや否やを明かにし、最後に米價調節が優先的に重要なりと假定するも果して今日政府が其調節を行ふことを要する時機が到達せりやを明かにすることに在るべし、以下此等の諸點に關し重要な反對の意見を掲げて、之が批評を試むべし。

## 第二、米價調節と一般物價調節との緩急

物價の調節を行ふて我經濟界の恢復を圖り、特に之に由て戦後に於ける先進國の捲土重來と後進

國の產業的擡頭との爲め前後より壓迫を受けつゝある我産業を一日も早く窮境より救ひ出だすの必要なるは、輿論の一致する所にして、不徹底乍ら政府も此輿論に従ふて既に物價調節の實行に着手しつゝある今日に於て、一切の政策は此目的に適合することを要し、少くとも之れを妨害することを許さずと斷定し得るが如し。

併し乍ら我國の物價が諸外國に比して高き時代と低き時代とを問はず、我國には永續的に困難なる食糧問題が存在し、之が解決は一時的の問題たる物價調節よりも一層重大なりとの意見なきにあらず、我國の米價は世界の重要商品に比類を見ざるが如き暴騰暴落を繰返し、之が爲め一方には消費者としての民衆の生活が甚だしく不安に陥りたり、現代産業の最大缺點は分配の不公平と民衆生活の不安定とに在りと稱せらるゝも、歐米にては主要食物たる小麥の價格が從來常に安定的にして收穫の良否に由る價格の高低は一割内外に止まれるに反し、我國の米價が四割五割の高低を繰返しつゝあることは、我國の社會的弊害の最も重大なるものに屬す、加之我人口の過半は農村に住する者なるが、眞の農業生産者は田畑平均一町歩を耕作するに過ぎざる自作農及小作農なり、彼等の生活も自給自足狀態より脱して貨幣經濟に移れる今日に於ては、米價の前述の如き激變が其生活を不安に陥るゝは勿論にして、其社會的弊害たるや少なくとも消費者の方面に於けると甲乙なし、固より豐年に於ても小作米收入の増加せざる地主階級が米價の下落に由りて受く

る打撃は客觀的には大なりと雖も、彼等は資力大なるが故に米價下落の損失を其騰貴の年に於ける特別の利益に由り、補償するの餘裕あるに反し、（米價騰貴するも小作米收入高は別段減少せざる故）小農には此の如き餘裕なきが故に、米價激變に由りて蒙むる主觀的の苦痛は遙かに大なり、更に他方には人口の過半が農民なるが爲めに我産業の農民を相手として成立する部分甚だ大なるが、米價の激變は農民の購買力に激變を生じ、従つて之を相手とする産業も激しき動搖に暴露せらるゝことは、我國民經濟の發達を害する根本的の障礙なり、固より産業の重要な部分が此の如く動搖するときは、之に従事する勞働者の生活が常に不安に脅かさるゝを免れず。

此の如く我國民經濟の根本的缺陷は、國民の主要食物にして同時に其生産が國民の主要産業となれる米の價格の激變に在りて、之を矯正するが爲めには結局穀物專賣制度を必要とするに至るべしとするも今日の根本策としては常平倉制度を適當に運用するの外なし、而して此制度が實効を奏するが爲めには、先づ或年に於て日本米の供給過剰を生じて其價の下落したる場合に、機を逸せず之を買上げて貯藏することを要す（今日まで政府が米價の暴騰を抑制するが爲めに巨大の費用を投じて外米を輸入し之を廉賣したるも其効果の甚だ小なりしは、國民の嗜好上外米が日本米の代用たる價值甚だ乏しきに由らずんばあらず）。若し供給過剰の年に於て米價の下落する儘に之を放任するときは、一方に米の消費が浪費的に増加し、他方に農民の資力衰退の結果次年度

以降の米作に對して充分の施肥耕耘を爲すことを得ず、之が爲め久しからずして米の大不足と其價格の暴騰とを生ずるを免れず、此の如き國民經濟上の根本的弊害を矯正するが爲めの常平倉制度は、物價の騰貴時代と下落時代とを問はず、一貫して之を勵行することを要し、一時の便宜の爲め之を左右することを許さずとの議論も起るべし。

更に目下の不景氣の爲めに切迫せる社會問題の解決上、米價調節と物價調節との何れを重しとすべきやに附ても意見の相違を生ずべし、消費者の立場を代表する一般新聞紙の論調に由れば、經濟界が不景氣となりて失業者の發生多く、特に物價調節の爲め少くとも一時は官民事業に於ける失業者を増大せしめつゝある今日に在ては、労働者の生計上最大の負擔たる米價の低落を圖ることを急務とす、又米と共に一般商品を下落せしめて對外競争上我産業の蒙むれる不利を脱し、以て一日も早く經濟界の恢復を圖ることが労働者の苦痛を救済する根本的方法なるが故に、此際米價下落を防止して物價調節に妨害を如ふことは到底認容するを得ずとの説が有力なるが如し、然れども之に對しては農民側より強硬の反對意見が起らざるを得ず、眞の農業生産者たる自作農及小作農は都會労働者と大差なき地位に立ち、其收穫米より自家の飯米を差引きたる僅少の過剩米を販賣して生計を立てざるを得ざるが故に、米價の暴落は彼等の生計に大なる壓迫を加へざるを得ず（米の供給を一割増加すれば米價は三割四割の下落を爲すと云ふが如く、米價が供給増減

に比例して騰落せるが故なり）、此等の農民の數は米の消費者たる都市勞働者に比すれば甚だ大なるが故に、米價暴落の社會弊害は其利益に比して遙かに大なりと云はざるべからず、世間或は農民中に副業を主として多少自家の飯米を購買することを要する者少なからざるが故に、米價の下落は最下層の農民に取りては利益なりと主張すと雖も、此の如き農民は主として大都市附近に存在するものにして、全國農民數より見れば小部分を爲すに過ぎず、且つ地方農民にして日傭稼ぎ運搬夫等の勞働を副業とする者は可なり多數なるは事實なれども、米價が下落して農村が不景氣となり、從て又直接に農村を相手として成立する地方都會も不景氣となるときは、細小農の勞役的副業も大打撃を蒙るを免れず、大都市勞働者の立場より米價の下落を主張する論者は、失業の頻出する今日に於て米價を下落せしむることを急務なりと云ふも、此失業者の大部分は戰爭以來工業の急激なる膨脹に伴ふて農村より都市に移りたる不熟練勞働者にして、其大部分は又失業と同時に農村に復歸して生活しつゝあるが、今後の失業者の少なからざる部分も亦歸農せざるを得ず、即ち今日の農村は都市失業者の生活を維持する最大の負擔者となりつゝあり、故に米價が暴落して農村が疲弊するときは、農村は此負擔に堪ゆる能はざるに至ること明かなれども、一方に今日の都市が失業者救済の力なきことは明白なり、故に米價を暴落せしむることは大都市勞働者の立場より見るも決して有利にあらずとの意見が起るべし。



### 第三、米價の高低と一般物價の高低との關係

一定量の通貨の流通に對して取引すべき商品が増加するときには物價平準の低下を生ず、本年の收穫米は特に多量なるに加へて古米の殘存高も甚だ大なることは既に述べしが、今や一般農民の實力は必ずしも強大ならずして米を賣るの必要多く、一面に其の所有新古米の多量なる爲め米價の前途に不安を感じ、其下落の大ならざる間に成るべく多く之を賣放たんとするの意向も頗る大なるが如し、之を自然に放任すれば本年度に於ける多量の米は過去に於けるが如く農民商人の手に由り貯藏せられずして市場に提供せらるゝの可能大なり、特に米の市場供給が増加して米價下落するときは、農民は必要の資金を得るが爲めに信用を利用する事難くして、多々益々米の販賣を増加せざるを得ざることとなり、之が爲め米價の下落が激甚となるの虞あり、又農民の財力は大體米價の高低に由りて左右せらるゝものなるが、米價下落の爲めに其財力の薄弱となれる年には、米以外の農産物の販賣に付ても農民が市場に於て強硬の取引態度を採ること難くして、其價格を下落せしむるの傾向あり。（米の如き生理的必要品にして其消費量を伸縮し得る弾力性の乏しきものに在ては、其供給高を一割増加すれば、價格の下落は一割に止まらずして三割四割に達すると云ふが如く大なる變動を爲すが故に、米價の下落は大體豊年に於ても農民の財力を薄弱ならしむ、

只だ大地主自作農及小作農が各米價變動に由り如何なる影響を受けるやの問題に付ては本誌第十二卷第二號掲載の拙文「常平倉制度の運用」を參考せられ度し、然るに今や政府が米價調節の爲め本年度の特別過剩米二三百萬石を市場より買上げて供給高を減すると同時に、其實上代金を市場に放出して通貨膨脹を來たすときは物價平均を高むることとなり、其れだけ一般物價調節を妨ぐることゝならざるを得ず（政府が米の買上代金の調達方法として公債募集、日本銀行よりの借入、又は政費節減の中止の何れの方法を探るも、其結果は通貨の膨脹又は其縮少の妨害となるべし）。

要するに米價の下落が米の供給増加の爲めに起るときは、物價平準を低下せしむることは明かなりと雖ども、茲に學究に取りて興味ある問題は、米價の高低が農産物以外の諸物價をも之に應じて高低せしむると云ふ相伴傾向ありや、又は反對の傾向ありやなり、我國の封建時代に於ては米價の高低が諸物價を高低せしむと云へる思想頗ぶる強かりしが、此兩者相伴の思想は今日に至るも尙ほ相當の勢力を有することは目下の世論に徴するも明かなり、然るに吾人が英書を繙くときは、主要食物、就中小麥の價格が騰貴すれば他の諸商品が下落すると云ふが如く、兩者の價格が相反關係に立つとの語句を見出す場合少なからず、若し我國に於ても米價の下落が諸商品の騰貴を生ずるが如き相反關係が存在するときは、今日米價調節を行ふも一般物價調節は左まで妨害を受けずとの結論に到達すべし。

我封建時代に於て米價と諸物價との相伴關係の存在に付き明確なる證據を擧ぐるゝこと難かるべしと雖ども、理論上幾分か此の如き傾向の存在を推定し得ざるにあらず、當時人口の大多數を占むる農民は主に自給自足的にして、偶ま商品を購入する場合にも米を以てすること多く(幕末には諸藩の財政紊亂して藩札を濫發し、明治維新の革命も紙幣の濫發を生じたるが故に、地方の取引は此等の不安定なる媒介物を避け米を以て媒介とするの必要ありたり)、從つて當時の社會に於て商品の主たる消費者は幕府、諸藩及之に隸屬せる武士階級なりしが、彼等の收入は主として又は全然年貢米より成り、從つて米價の高低が直接に此中心的消費者の購買力を増減したるが故に、商工業の盛衰は米價の高低に係はること大ならざるを得ず、他方に當時の商工業は小規模の經營にして今日の如き賃銀労働者少なく、主たる従業者は主人と同居して衣食住を供給せらるゝ徒弟又は丁稚番頭なりしが故に、米價が騰貴すれば商工業者は従業者の給養の爲めの費用即ち商工業の生産費の増加を生じ、從つて物價を引上ぐるの必要に迫られたるべし、固より米價と共に諸物價の騰貴するが爲めには、必らず一方に通貨の膨脹することを必要とす、今日の文明國に於ては貨幣の死藏せらるゝもの極めて少なく、不用通貨の大部分は銀行保險郵便信用組合等の貯蓄機關に託せられ、其貯金が資本として世間に流通するものなるが、舊時代には汎く貨幣の死藏が行はれたるが故に、生活の必要に迫らるゝときは此死藏貨幣が市場に出現し、以て物價平準を高めた

ることも想像し得べし、只だ米價騰貴の程度が甚だ大なるときは、通貨の膨脹が之に伴ふことを得ざるべきが故に、此相伴關係は無制限に實現せらるゝを得ざるべし、現に米價騰貴の甚だしき年には商工業者の生活の困難を生じて社會的不安を來たし、之が爲め幕府及諸藩は種々の方法に由り米價の引下げに努力するの必要に迫られ、單に武士階級の利益のみを重んずるを得ざる場合の多かりしことは之を證し得るものゝ如し。

今日の經濟事情が封建時代の夫れと著しく相違し、従つて米價と諸物價との關係も同一視するを得ざるは、多言を要せず、世間或は勞銀が米價の高低に伴ふて變動するの傾向ありと主張する者あれども、此の如き傾向は理論上將た實際上一般的に之を認むること難し、只だ今日の場合に於ては特別の理由より論者の主張が或程度に眞理ならざるやの問題は研究の餘地あり、即ち今日物價下落の割合よりも勞銀下落の割合が少なく、勞働能率に對する勞銀の比較より見れば我國の勞銀は世界最高と云ふべく、此の如く勞銀の高きことが先進國及後進國との競争に於て我産業を今日の如く窮地に陥るゝ重大原因なりとの議論は汎く行はれつゝありと雖ども、戦争以來社會的思想の進歩せる結果として、生活必需品就中食物の高價なる間は一般企業者が勞銀を引下ぐることに躊躇しつゝあり、故に此際米價にして充分に下落するときは、勞銀の引下げも相當に行はれ之に由て生ずる生産費の減少が生産高の増加を來たして物價平準を下だすに至ることなきやの問

題は研究を要す。

次に英書に散見する所の思想即ち主要食物の價と他の諸物價とは騰落の相反關係を有すると云へる思想の由來を考ふるに、恐らく下に述ぶる英國特有の事情と一般理論との二者に在るべし、先づ英國特有の事情と云ふは、英國が其食物の大なる部分を輸入するの地位に在ることなり、此種の食物輸入國に在ては食物價格の騰貴は輸入超過を生じ、從つて正貨の流出と之に伴ふ通貨信用の收縮を來たして物價平準を下だすべく、又食物下落の場合には反對に物價平準を高むべし、我國は食物に付ては今尙は大體に自給狀態を維持し、外米輸入は過去に於て通例は二三百萬石を出でず、其價格も數千萬圓を超ゆること稀なるが故に、二十億圓に近き總輸入高に對しては重要な地位を占めず、次に兩者の相反關係の理論的根據とは他なし、穀物の價格が其供給減少の割合よりも多く騰貴して一般消費者が其所得の多くを之に支出することを要するときは、他の商品の購買の爲めに支出し得る部分が減少すべし、更に客觀的に云へば穀物騰貴の爲め一國の通貨の大なる部分が絶えず穀物取引の爲めに使用せらるゝことを要するときは、一方に於て他の商品の取引の爲めに使用し得べき通貨の量が其れだけ減少せざるべからずと云ふに在り、固より文明國に於ては取引の必要に應じ信用の膨脹して通貨の不足を補ひ得る程度は大なりと雖ども、文明國の信用膨脹は主に生産的信用の方面に限られ、消費の必要の爲めに一國の信用取引が著しく膨脹す

ることは不能なり、此相反關係の理論は食物以外の或商品と其他の商品との間にも汎く適用し得べきが如しと雖ども、或商品にして其價格が騰貴すれば之に對する需用も同じ割合に減すると同時に其生産が迅速に増加するときは、此種の相反關係が強く現はるゝを得ず、故に此理論は主として價格の騰貴せる場合に其需用を減少すること難きと同時に、次の收穫期までは生産高を増加するを得ざる穀物の如き場合に適用せらるゝことは明かなれども、尙ほ此場合に於ても此理論が果して正當なるやは研究の餘地あるが如し、而して我國は食物に付ては大體に自給的にして食物以外の商品には貿易關係のもの多し、然るに今日の物價調節の重大目的は貿易上の不利より來る經濟の不振を恢復するに在り、故に若し米價の騰貴が其他の商品就中貿易關係の商品を下落せしむる相反關係ありとすれば、今日米價の下落を防止する常平倉制度の運用は必ずしも實行中の物價調節の目的に反せざることゝなるべし。

#### 第四、今日は果して米價調節の實行を必要とするの時機なりや

本問題は米穀法を如何に運用すべきやの問題なるが、之に關しては同法制定の際に本誌第十二卷第二號に發表したる見「常平倉運用の標準」を參考されんことを請ふ、只茲には米の民間貯藏と政府貯藏との關係を一言して舊論文を、補足し且つ同論文に對して起るべき反對説の批評を掲ぐべし。

米の存在量と其市場供給量とは必ずしも同一物にあらず、米の存在量が巨額に達するも、若し

農民就中多額の小作米を有する大地主にして、以前の米價騰貴に由り強大の財力を有するが爲めに、其所有米を賣急がず、米價が過度に低落せんとすれば之を貯藏して後日の價格恢復を待つことを得るときは、米の存在量は大なるも其供給量は小ならざるが故に米價も特別に下落せず、之に反し收穫が幾分か不良の年に於ても農民が以前の米價下落に由り財力衰退せるが爲め、收穫米を投賣するの已むを得ざるに至るときは、米の存在量は小ならざるも目前の市場供給量は相當に大となりて米價が不自然に下落する場合あるべし、更に一步を進めて論すれば、同量の米を市場に供給する場合に於ても、供給者の財力の強弱に由りて、其取引の態度に硬軟の差を生ずるときは、市場心理に異なる影響を及ぼすが爲め、米價に高低の差を生ずべく、同一の供給量は常に機關的に同一の價格を生ずと斷定するを得ざるは、年々の米價變動の經過に照して明かなり、而して政府の常平倉は年々の過剰米を獨占的に貯藏することを任務とするにあらず、若し民間に於て之を貯藏するの實力あるときは其貯藏を民間に放任せざるべからず、若し常平倉が過剰米の貯藏を獨占せんとするときは、全く常平倉の目的を破壊する場合を生ぜざるを得ず、何となれば民間に於て充分の貯藏力あるときは、米の存在量は亘多なるも其の市場供給量は亘多ならず、之が爲めに米價も相當に高かるべし、此場合には米の消費が浪費的に増加するの危険なく、又農民の財力が衰へて次年度以下に於ける施肥耕耘の不足に由り收穫不良を來たすの虞れなく、即ち政府が強て米を買上ぐるの必要なきのみならず此の如く米價が相當に高き場合に於て、單に其存在量が

巨多なりとの理由より政府が強て米を買上ぐるときは、不自然なる米價暴騰を生じ、以て米の生産と消費との均衡を攪亂すると同時に、常平倉自身も財政的に破産せざるを得ず、米の存在量が少なきに係はらず、農民の投賣の爲めに米價が下落せんとする場合に常平倉が單に米の存在量の小なるを理由として其貯藏米を市場に賣出すべからざることも上に述ぶる所に由りて自から明かなるべし、要するに常平倉の買入賣出には米の存在量の多少よりも其市場供給量の過不及を標準とせざるべからず、只其供給量の過不足を如何にして發見すべきやは困難なる問題なり、從來年々の收穫米が農民の手を離れて都市の米商人に移りし高は時々調査して其概數を知り得たりと雖ども、農民の手を離れたる米は或は米問屋に由りて貯藏せられ、或は米相場師の手に由りて貯藏せらるゝことあり、故に眞の供給量は種々の徑路に由りて白米小賣商人の手に渡りたる量ならざるべからずと雖ども之を調査することは實際に不能なり、假りに其數量を知り得るとするも時々需用に對して過多なりや不足なりやは單に其數量より判斷するを得ず、只此の供給量の過不及は米の消費に最も密接の關係を有する正米市場に於ける米價の高低となりて比較的明瞭に外面に現はるゝものなり、故に常平倉運用の標準も米價の高低ならざるべからず。

以上は前述公表の卑見を補足的に説明したるものなるが、固より之に付ては反對論あり、即ち政府が米の賣買を行ふて米價を適度に保たんとするは、是れ即ち官吏をして米相場師の事業を行はしむるものにして、其實行は必らず失敗に終るべく、特に如何なる價格を以て適當とするやを



決定することも殆んど不能なり、故に常平倉は直接に米價を調節することを止めて數量の調節を行はざるべからずとの説が、當時學界に於て行はれしのみならず、政府も最初米穀法案を衆議院に提出せる際には同様の意見を有したるが如し、然れども其の數量的調節とは何を意味するやは明瞭ならず、大體には米の存在量を指すが如しと雖ども、前述の如く米の存在量と其供給量とは同一にあらず、實に我國に於て從來其の存在量と供給量とが常に一致せずして殆んど周期的に米の大過剰と大不足とを生じたることが、米價の暴騰暴落を繰返したる大原因なり、故に論者が數量標準と稱するは供給量の意ならざるべからずと雖ども、供給量の過不及は間接に米價の高低に由りて之を知るの外なし、故に米價調節には何を標準とすべきやは、價格と數量との何れを取るべきやの問題にあらずして、如何なる價格を取るべきやの問題ならざるべからず。

調節標準たるべき米價に關して前述公表の卑見は、米價の高低が一般物價平準の高低に一致することを理想とし、只だ年々の收穫の豊凶に由り或程度までの高低を認むべしと云ふに在りと雖ども、之に付ては農民側より強硬の反對意見が起るべし、即ち從來農業生産者は商工生産者に比して不當に小なる所得に満足したるも今後は此不公平を矯正することを要す、加之我農業には夙に收穫漸減法則が相當に強く働き、即ち年々米の生産費が増加しつゝあるが故に、米價は諸物價よりも年々騰貴することを正當とすとの主張が起るべし、戦前に比して今日の物價平準は約二倍

となれるが、一方に戦前の米價は十五圓強にして（此米價は生産者消費者双方より公平のものと認められたることは其以前の大隈内閣の米價調節の標準を決定する際の輿論に徴して明かなり）今日の米價は新米三十圓内外なり、即ち米價も戦前の約二倍にして一般物價平準と歩調を同じうす、或は今後の米價が尙ほ幾分の下落を示すことあるべしと雖ども、本年度の收穫が平年作以上なるが故に、之に相當して物價平準以下に下落することは當然といはざるべからず、故に米價調節を物價調節より重要視すべきものと假定するも、前に發表せし卑見によれば此際政府が米の買上げに着手するは時機尙早となるべく、反對意見によれば米の買上げの時機は夙に到達したることとなるべし、何れの意見が正しきやを決するには種々の觀察點ありと雖ども、根本的には我國の食糧問題及社會構成問題に遡り、日本内地領域以外に日本人の嗜好に適する米を低廉に生産するの可能ありや、此可能が存在するも尙ほ食物自給主義を探り、従つて我人口の大なる部分をして飽くまで農村を構成せしむべきやの問題より研究することを要すべし。

尙ほ米價調節問題と農民との關係を研究するに方つて吾人は自然に魚價問題と漁民との關係に考へ及ばざるを得ず、我國の沿岸到る處に住する漁民の大部分即ち沿海漁業に従事する漁民を見るに、其經濟的地位は大體に農民よりも更に低く、之を以て我國に於ける最下層の重要社會階級と稱するを得べし、彼等も時勢の進歩と共に次第に覺醒しつつあるが故に、彼等が少くとも都市

勞働者及農民と對等の地位に立つことを要求するは自然の勢なり、而して彼等の經濟的地位を向上するには種々の條件ありと雖も、其の集約なる漁業に必要とする多大の勞働特に危險と苦痛の大なる勞働に對して公正の分配を得せしめんとすれば、其收穫せる魚類の價格が相當に高きことを要求するは、恰も農民が其地位の向上の爲めに米價の相當に高きことを要求すると異ならず然るに近來魚類を遠隔の地に輸送し且つ永く之を保存する方法が次第に進歩し、一方には遠洋漁業が長足の進歩を爲しつゝあり、之が爲め極めて低廉の魚類が我領土の内外より消費中心地たる諸大都市に供給せらるゝことゝなり、特に政府が今回の物價調節策として採用せるものゝ中には、中央市場、冷藏船、等の設備を獎勵助長することゝしたり、總て此等の政策は内地に於ける魚價の騰貴を抑えて、只さへ困窮に陥れる沿海漁民の生活を壓迫するを免れずと雖も、世人は一般に之を以て國民の食料供給を豊富低廉ならしむる爲めに己むを得ざるものと認め、此等の困窮せる漁民は或は遠洋漁業海運業等の勞働者となり、或は農工業等に轉ずることを適當と認むるものゝ如く、之に付ては別段の議論も起らず、吾人は外國より低廉の農產物就中穀物を輸入して我國民の食料問題を解決するの問題に付き同一の態度を探りて農民に對することを得るや、或は農民の場合は漁民の場合と區別して觀察するの必要ありやを研究せざるべからず。

追

記

×

×

×

×

我國民の食糧問題を研究するには先づ先進の白人諸國民の同種問題の經過を明かにすることを要す、比較的小區域に住居する歐洲白人が今日の如き經濟上の大進歩を爲したる所以に付て、世人は通例表面的事實のみに着眼し、即ち此等白人の創造力に由り産業革命を行ふて商工業方面に偉大の發達を爲したるが爲めなりとするを常とすと雖ども、白人が其創造力を自由に活用して今日の如き商工業的都市の文明を造り上ぐる爲めには、先づ低廉なる農産物の供給を得ざるべからず、若し彼等にして其の需用する食物を狭小なる歐洲の區域内に生産せんとすれば、收穫漸減法則が強く働き其資本と勞働とを食物生産の爲めに費すの必要益増加し、而も其收穫は甚だ不充分となり、商工業方面への發展は根本的に阻止せられざるべからず、然るに歐洲人は夙に世界各方面に於て自己の食物原料生産に利用し得べき土地を探險して之が利用の方法を講じ、極めて低廉なる農産物を獲得し得たるが故に、能く商工業的に大發展を爲すことを得たり、歐洲に於ける十九世紀末の小麥價格は同世紀中葉過ぎの夫れに比して殆んど二分の一に下落し、之が爲め歐洲一般特に人口の稠密なる西歐に於ては耕作限界地が高まり、以前の耕地が牧場森林に退化せし所少なからず、商工方面に最も強く發達せし英國に於て特に然りとす。

此の如き商工偏傾の方針に付ては議論の餘地大なるべしと雖ども、山嶽國にして可耕地の極端に狭小なる國土に密住せる我國民が今後或程度に世界の諸方面に於て自己の嗜好に適する食物生

産の發達を圖るの必要あることは、多くの異論なかるべく、又此の如き生産の發達が充分の可能性を有することも争ふべからず、日本米系統の米は朝鮮に於て年々産額を増加し（所謂改良種）滿洲に於ても同様に發達しつつあるが、更に支那の一部（特に江蘇省大潮附近）には現に日本人の口に適する米が多量に生産せられ、今後其産額増加の餘地少なからず、更に最近米國カリフォルニアに於て日本米種の生産急激に増加して昨年以來輸入せられつつあり（之に關しては十一月八日の大阪朝日新聞經濟欄記事參照）、之が爲め日本米の生産は今後は必ずしも從來の如くモンスーンの來襲に由り雨量の大なる東洋方面に限られざることを信ぜしむるに至れり、加之米の大輸出地たる英佛領後印度の産米に付ても其品種と製調方法を改良して日本人の嗜好に適應せしむること必ずしも不能ならざるべし、今日我國民は文明國民の食用穀物に比して殆んど三倍の高價を保てる特有の日本米を食用しつつあると同時に、此貴重なる日本米の中より年々數百萬石を酒造用に供しつつあり、故に外米其他の穀物を以て酒造に供するの研究も必要なるべく此事も大なる程度の可能性を有するが如し、更に遡つては低廉なる外米其他の穀物に對する國民の食用的嗜好の發達を圖ることも必要なるべし、單に國民衛生の上より見るも今日の如く日本人が經濟の進歩に伴れて多々益々日本米專用に偏傾しつつあることは非常の不利益にして、諸外國民の如く雜食國民たらしめざるべからず（本誌掲載の食糧問題米價調節及支那穀物輸出禁止制度批評等を參考せられ度し）、總て此等の國民食糧問題に付き遠大の計畫研究なく、單に西洋の機械工業を模倣すれば經濟の進歩を爲し得べしと考ふるが如き、從來の粗雑なる思想を抛たざるべからず。